

山口県域に投影された畿内政権の動静

田中晋作

1. はじめに

本稿の目的は、恣意的な設定であるが、現在の山口県域にあたる瀬戸内海沿岸地域を中心にして、古墳時代前期から中期の畿内政権と当該地域の諸勢力との関係の推移を、「モノ」の移動を手がかりにして明らかにすることである。またあわせて、瀬戸内海における政治的交通の成立が（石母田1971）、早くから指摘されてきたように古墳時代前期にあり、さらに古墳時代中期にその安定化が図られることを示す（間壁1970・松原2004・福永2005・近藤2008他）。

ところで、本稿で手がかりにする「モノ」の移動は、本来ある場所から別の場所に移るという単純な現象であるが、これにともない「モノ」の移動に介在した人びとの間にさまざまな関係を生むことになる。移動する「モノ」がもつ社会的な価値や機能、また移動の目的や方法、さらには移動にかかわる人びとの社会的な地位などによって、その関係が大きく違ってくる。むろん、ここで取り上げる「モノ」は、器物に限ったものではない。人の場合もあれば、情報や技術、知識などの形のない「モノ」も含み、これらが多種多様な遺構や遺物として残されることになる。なお、ここでいう「モノ」の移動は、「物流」（宮下2004）という経済的交通による移動ではなく、政治的、社会的な行為としての移動をいう。また、対象とする「モノ」に、受容者側で二次的な移動があった可能性は否定できないが、ここでは考えないこととする。

さらに、本稿で採る方法は、内容が明らかになった古墳を対象にするため、内容が明らかでない場合には「ない」という判定しかできないという不備がある。今後の調査等によって「ない」が「ある」に、「少ない」が「多い」に、「断絶」が「継続」に、「偏在」が「不偏」にといった、大きな修正を必要とする可能性がある。あくまでも現在明らかになっている資料によって検討するものとする。

2. 複数の勢力が盛衰を繰り返す古墳時代前期の山口県域

さて、これまで多くの研究者によって指摘されてきたように、古墳時代前期前半に大和盆地東南部地域に興った有力勢力が、古墳時代をとおして安定的な成長を遂げるのではなく、複数の有力勢力の間で政権の主導権をめぐる確執があったと考えている（白石1969・都出1999・田中2001・2009・福永2005他）。研究者間にあつてその内容に若干の齟齬があるが、本稿では政権の主導権は、前期後半には大和盆地東南部地域の

勢力から佐紀・馬見古墳群の勢力へ、さらに中期には百舌鳥・古市古墳群の勢力へと移動したと考える（田中2009）。一方、山口県域にあっても、やはり特定の有力勢力が古墳時代をとおして安定した成長を遂げるのではなく、諸勢力間にさまざまな盛衰があったことが明らかにされている（富士埜1980・小野^忠1985・中村1991・2008・森田1995・2008他）。

まず、山口県域にあたる瀬戸内海沿岸地域の諸勢力の盛衰が、畿内政権の中核勢力との直接的な関係の有無に起因することを明らかにすることからはじめたい。

古墳時代前期前半、山口県域では同じ都濃地域にありながら、相互に距離を置く周南市竹島御家老屋敷古墳と下松市宮ノ洲古墳が出現する⁽¹⁾。前者は徳山湾に浮かぶ島嶼に、後者は笠戸湾に浮かぶやはり島嶼に築造され⁽²⁾、ともに後継古墳の築造がみられない。

竹島御家老屋敷古墳は、段築、葺石をもつ全長56^尺の前方後円墳で、埋葬施設は竪穴式石室、さらに副葬品は初期の段階の三角縁神獣鏡とともに銅鏃を含む武器、農工具というきわめて整った内容になっており、大和盆地東南部地域の勢力との強い関係をもって出現した古墳である（福永2005）。一方の宮ノ洲古墳は、墳丘の形、埴輪や葺石の有無については不明であるが、同じく竪穴式石室をもち、竹島御家老屋敷古墳につぐ段階の三角縁神獣鏡の出土が知られ、やはり大和盆地東南部地域の勢力と強い関係をもった古墳である。両古墳の出現は、すでに指摘されているように、瀬戸内海における政治的・交通の成立を示していると考えられる（近藤2008）。

ここでは、限られた資料の中から三角縁神獣鏡を取り上げて、大和盆地東南部地域の勢力との関係を、後述する前期後半の事例を含めてみてみたい。

三角縁神獣鏡は、古墳時代前期前半に畿内政権の主導権を握った大和盆地東南部地域の勢力が独占した「モノ」である。その分布は強い偏在性をもつことから、「ある」こと自体が重要な意味をもつ。とくに、三角縁神獣鏡のように政治的、社会的に大きな影響力をもつ「モノ」は、大和盆地東南部地域の勢力と山口県域に所在した諸勢力との関係を考える上できわめて有効な資料になる。

三角縁神獣鏡は、上記2古墳以外に、厚狭地域で前期後半の山陽小野田市長光寺山古墳と前期末の宇部市松崎古墳⁽³⁾、そして実物資料は確認できないが、熊毛（玖珂）地域で前期末の柳井市柳井茶白山古墳で出土している。これらの三角縁神獣鏡は、表1に示したように、その初期の段階から最終の段階までのものがほぼ連続してみられ、供与された三角縁神獣鏡はそれぞれの段階で副葬されている。また、同一古墳で大きな段階差のある三角縁神獣鏡が共伴する事例や、古い段階の三角縁神獣鏡が新しい時期の古墳に副葬された事例がみられない⁽⁴⁾。

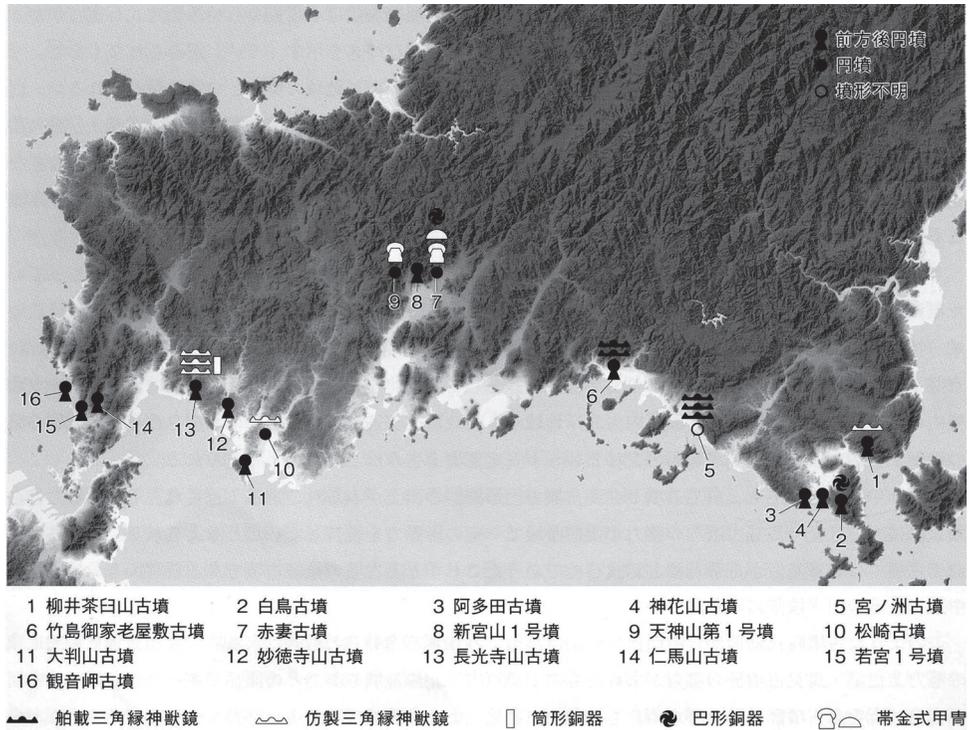


図1 関連古墳分布図 (田中晋作2012より)

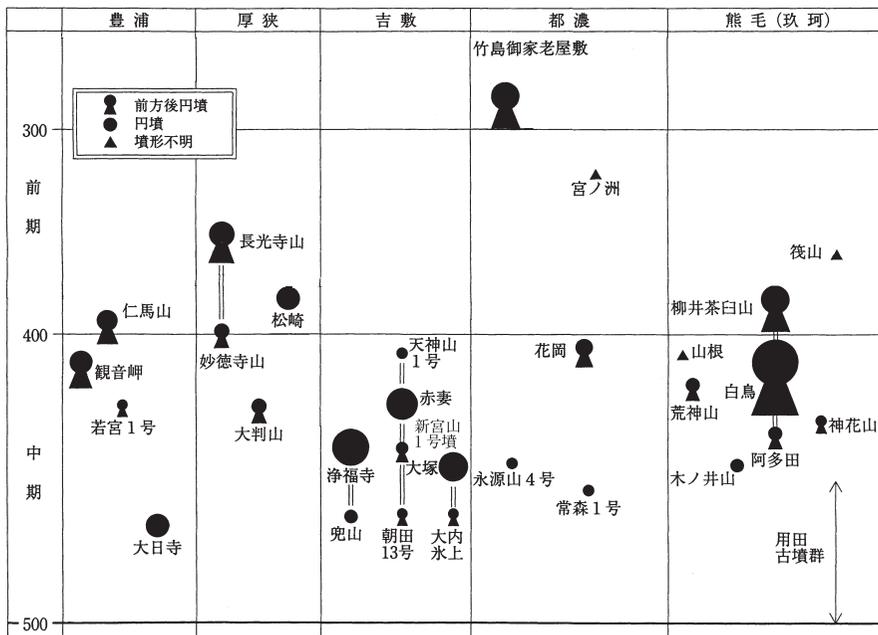


図2 山口県域の主要前期・中期古墳 (中村2008を改変)

ところが、山口県域における三角縁神獸鏡の出土古墳の分布をみると、特定の勢力に対して継続した供与が行われず、さらに、同時期の複数の勢力に対して供与された形跡もみられない。つまり、山口

出土古墳	船載鏡				仿製鏡			
	A	B	C	D	I	II	III	IV・V
竹島御家老屋敷古墳	1	1						
宮ノ洲古墳	1	1	1					
柳井茶白山古墳					1?			
長光寺山古墳						3		
松崎古墳								1

表1 山口県域出土三角縁神獸鏡と段階
(福永2006により作成)

山口県域でみられる三角縁神獸鏡は、それぞれの時期で供与の対象となった勢力がひとつに限定され、かつ、その勢力がそれぞれの時期で異なっていたことになる。

このような現象は、大和盆地東南部地域の勢力にとって、長期間にわたって関係を維持する必要がある特定の地域ないしは勢力が存在していなかったことを示している。現状から判断する限り、山口県域にあたる広範な沿岸地域が、大和盆地東南部地域の勢力にとっては、三角縁神獸鏡を供与する「ひとつの地域」として認識されていたかのような印象を受ける。

一方、山口県域に隣接する地域では、一定の生産基盤をもった有力勢力であることが三角縁神獸鏡の供与に結びついたと考えられるのに対して、山口県域では、勢力を支えるのに十分な生産基盤の存在について疑問視する見解があり、たとえば竹島御家老屋敷古墳の被葬者が中央から派遣されたのではという考えも提示されている(中村2008)。さらに、これらの三角縁神獸鏡出土古墳が瀬戸内海交通の要衝に位置しながら、内陸部への結節点として果たした役割が十分にみえてこない。とくに、竹島御家老屋敷古墳と、これにつづく宮ノ洲古墳が島嶼に築造されていることはこのことを象徴している。瀬戸内海沿岸地域にあって、海上交通の要衝と考えられる地点や地域に築造された古墳は多く指摘されているが、島嶼に築造された古墳から三角縁神獸鏡が出土しているのは、竹島御家老屋敷古墳と宮ノ洲古墳だけである。山口県域でみられるような脆弱な生産基盤に拠る勢力への三角縁神獸鏡の供与は、大和盆地東南部地域の勢力の側により強い選択権を生み出した可能性が高い。なお、柳井茶白山古墳以東では広島市中小田1号墳が、また長光寺山古墳以西では福岡県石塚山古墳がもっとも近い距離に位置する三角縁神獸鏡出土古墳である。

3. 佐紀・馬見古墳群の勢力が新たに生み出した「モノ」

古墳時代前期後半、それまで強勢を誇ってきた大和盆地東南部地域の勢力に替わって、佐紀古墳群を中心とする大和盆地北部地域の勢力と、馬見古墳群を中心とする大和盆地西部地域の勢力へ畿内政権の主導権が移動する。大和盆地東南部地域の勢力は、これ以降も一定の命脈を保つとはいえ、その影響力は急速に弱まることになる(田中

2009)。

さて、佐紀・馬見古墳群の形成とともに、それまでにはみられなかった石製模造品・筒形銅器・巴形銅器・鉄製短甲・新式神獸鏡といった副葬品が現れる(田中2009・福永2012)。これらの副葬品は、出土古墳数、出土量がともに限られ、さらにそれらの分布は三角縁神獸鏡にもまして強い偏在性をもっている。とくに、実用的な機能をもたない「モノ」は、その「モノ」を創出した主体がもつ影響力によってその価値や役割が決定される。このような「モノ」である上記の石製模造品などの副葬品の受容とその広がり、創出主体である佐紀・馬見古墳群の勢力との関係をもっともよく表わすとともに、その影響力をはかる上でも有効な指標になる。

これらの副葬品のうち、山口県域では、厚狭地域の長光寺山古墳から筒形銅器が、これに遅れて中期前半で熊毛(玖珂)地域の平生町白鳥古墳と、吉敷地域の内陸部に位置する山口市赤妻古墳から巴形銅器が出土している⁽⁵⁾。

筒形銅器は、古墳時代前期半ばないしは後半から中期前半にみられる古墳副葬品で、出土地不詳例を除くと、畿内とその周辺地域を中心に42古墳から出土している。東は埼玉県から西は熊本県までの分布が知られているが、特定の古墳群や地域で継続した出土がみられない。また巴形銅器は、筒形銅器と併存する古墳副葬品で、やはり畿内とその周辺地域を中心にして、東は神奈川県から西は福岡県までの範囲に分布するが、出土例はわずか23古墳と、きわめて限られている(田中2009)。

まず、古墳時代前期後半の長光寺山古墳では、既述したように、仿製三角縁神獸鏡が相伴しており、大和盆地東南部地域の勢力との関係とともに佐紀・馬見古墳群の勢力との関係がみられる。厚狭地域では、長光寺山古墳につづく有力古墳は、系譜の異なる前期末の松崎古墳で、最終段階の仿製三角縁神獸鏡が出土している。

ところで、長光寺山古墳の後継古墳である、中期前半の山陽小野田市妙徳寺山古墳が厚狭川の対岸に築造される。全長30_{メートル}の前方後円墳であるが、埋葬施設は石棺系竪穴式石室で、葺石や埴輪もなく、副葬品も表2に示したようにきわめて限られ、長光寺山古墳との間に歴然とした格差がみられる。

一方、仿製三角縁神獸鏡が出土している松崎古墳は、直径28_{メートル}の円墳で、埋葬施設は箱式石棺、また葺石や埴輪もみられないが、武器や農工具等を含むまとまりをもった副葬品をもっている。畿内政権の主導権が佐紀・馬見古墳群の勢力に移動し、大和盆地東南部地域の勢力の影響力が急速に弱まる前期末の段階にあっても、直接的な関係をもったことが、妙徳寺山古墳との格差として現れている。つまり、畿内政権の中核勢力との直接的な関係の有無が、このような格差を生む要因になっていたと考えられる。

三角縁神獸鏡をもつ柳井茶臼山古墳を前期末に位置づけるとすると、熊毛（玖珂）地域では大和盆地東南部地域の勢力との関係から、中期前半には白鳥古墳が佐紀・馬見古墳群の勢力との関係をもつことになったと考えられる。前期後半から中期前半にみられる山口県域での諸勢力の動静は、佐紀・馬見古墳群の勢力と新たに直接的な関係をもった勢力が、影響力の低下していく大和盆地東南部地域の勢力との直接的な関係を維持しながら、厚狭地域（長光寺山古墳）から熊毛（玖珂）地域へ移動したことを示している。

また、古墳時代前期後半の段階で、円筒埴輪以外に形象埴輪をもつ古墳は、長光寺山古墳と柳井茶臼山古墳だけである（増野2010）。このことが、畿内政権の中枢勢力との直接的な関係に結びつくわけではないが、畿内との深いつながりがあったことを示すひとつの現象としてあげることができる。

このように、山口県域では、前期後半に佐紀・馬見古墳群の勢力が畿内の主導権を握った以降にも大和盆地東南部地域の勢力との関係が依然として継続していたことが伺える。このことは、大和盆地東南部地域の勢力から佐紀・馬見古墳群の勢力へという畿内政権の中枢勢力の交替が、たとえば畿内とその周辺地域でみられるような特定の首長系譜の断絶と新たな首長系譜の台頭といった（都出1988・1999・福永2005・田中2012）、一線を画するような変化として現れないことは注意を要する。

4. 百舌鳥・古市古墳群の勢力との軍事的関係

百舌鳥・古市古墳群が台頭する古墳時代中期に入り、両古墳群の勢力から西日本の新興中小勢力を中心にして、帯金式甲冑を含む大規模な武器の供給がはじまる。これらの古墳では、甲冑を中心に刀や剣・ヤリや鉾・鉄鎌などの組成として整った武器の副葬が共通してみられる。

さて帯金式甲冑は、百舌鳥・古市古墳群の勢力のもとで一元的に生産され、その意図によって供給されていたと考えられている（北野1969）。三角縁神獸鏡や筒形銅器といった「モノ」は、供与者と受容者との関係を象徴的に示す器物であったことに対して、武器としての甲冑は、軍事的な利害に直接かかわる強い結びつきがあったことをあわせ示す「モノ」である。

山口県域では、帯金式甲冑は、吉敷地域の山口市天神山第1号墳⁽⁶⁾と同赤妻古墳で出土している。前者では頸甲と肩甲を備えた長方板革綴短甲が、後者では頸甲と肩甲を備えた三角板革綴衝角付冑と革綴短甲がみられる⁽⁷⁾。

天神山第1号墳は、竪穴式石室を埋葬施設とし、重厚な武器が副葬されていたとはいえ径15 $\frac{1}{2}$ の円墳にすぎず、これにつづく赤妻古墳は直径32 $\frac{1}{2}$ の円墳もしくは帆立貝

ていない。つまり、甲冑を手がかりにすると、この時点で百舌鳥・古市古墳群の勢力との直接的な関係が途絶えていたことになる。埋葬施設が竪穴式石室であった天神山第1号墳に対して、後継の赤妻古墳では舟形石棺と箱式石棺になっている。さらに新宮山1号墳は、全長36_㍉の前方後円墳でありながら、埋葬施設は石棺系竪穴式石室となり、葺石や埴輪がなく、副葬品も表2に示したようにきわめて限られ、赤妻古墳との間に大きな格差が生まれている。時期は異なるが、さきにみた畿内政権の中核勢力と直接的な関係をもった長光寺山古墳と、関係が途絶えた後継の妙徳寺山古墳でみられた状況と同様のことがおこっている。

ところで、関東地方以南で出土する帯金式甲冑を、現在の都道府県別にその出土古墳数と出土量をみると、山口県が出土古墳数、出土量ともにもっとも少なくなっている。ただし、古記録によると少なくとも他に2例の帯金式甲冑が出土している可能性がある（山口高等学校歴史教室1928）。吉敷郡秋穂村大字大海所在古墳⁽⁸⁾（現山口市秋穂東）と宇部市西区宇部新川駅前所在古墳⁽⁹⁾（現宇部市上町カ）である。とくに大海所在古墳では「陶器」が相伴したとされており、中期半ば以降の古墳であった可能性が高い。確実な資料ではないが、かりに両古墳から甲冑が出土していたとすれば、天神山第1号墳・赤妻古墳以外に沿岸部の勢力に百舌鳥・古市古墳群の勢力から甲冑が供給されていたことになる。

また、古墳時代中期の吉敷地域で、形象埴輪を含む埴輪が赤妻古墳と山口市浄福寺古墳で出土している（増野2011）。とくに赤妻古墳では、調査によって不明形象埴輪の出土が報告されており、また『周防国吉敷郡下宇野令村赤妻吉光長者榎塚発見器物図本』に靱形埴輪や盾形埴輪が図示されていることから、多様な形象埴輪の存在が想定できる。これらの埴輪からだけでは畿内政権の中核勢力との直接的な関係を導き出すことはできないが、他の勢力に比べ畿内とより深いつながりをもっていたことがわかる。この点については、天神山第1号墳→赤妻古墳→新宮山1号墳の系譜とは異なるが、内容が不明である直径40_㍉の大型円墳浄福寺古墳や、直径30_㍉の円墳で箱式石棺を埋葬施設とし、葺石と埴輪を備えた山口市大塚古墳など、吉敷地域で中期に築造された古墳の位置づけが今後の課題である⁽¹⁰⁾。

ここで問題になるのが、天神山第1号墳と、併行する時期に熊毛（玖珂）地域で築造された山口県下最大の前方後円墳である全長120_㍉の白鳥古墳との関係である。既述したように、白鳥古墳は、埋葬施設が箱式石棺と推定されるが、佐紀・馬見古墳群の勢力との直接的な関係を示す巴形銅器が出土し、山口県域では限られた家形埴輪をもつなど、畿内との結びつきが深い古墳である。しかし現在のところ、百舌鳥・古市古墳群の勢力との直接的な関係を導き出すことができる資料は確認されていないこと

から、古墳時代中期前半の山口県域では、佐紀・馬見古墳群の勢力と関係をもつ熊毛(玖珂)地域の沿岸地域の勢力と、百舌鳥・古市古墳群の勢力と関係をもつ吉敷地域の内陸部の勢力が併存していたことになる。

ところが、白鳥古墳の後継古墳とされる阿多田古墳は全長40mの前方後円墳で、葺石はあるが埴輪を欠き、埋葬施設は竪穴式石室で、現在確認できる副葬品は表2に示したように鏡と玉類だけである。本墳が示す内容は、既述した妙徳寺山古墳や新宮山1号墳のように、畿内政権の中核勢力との直接的な関係が途絶えたことによって一気に後退したことを示している。すなわち、山口県域の瀬戸内海沿岸地域に築造された古墳で、畿内政権の中核勢力と直接的な関係をもつ勢力は、白鳥古墳をもって途絶えたことになる。

一方、古墳時代中期の政権中核勢力である百舌鳥・古市古墳群の勢力と直接的な関係をもった勢力が、それまでの沿岸地域から内陸部に移ったことは、佐紀・馬見古墳群の勢力に替わって政権中核勢力となった百舌鳥・古市古墳群の勢力が山口県域に求めたものがそれまでと大きく変化したことがわかる。このことは、大和盆地東南部地域の勢力や佐紀・馬見古墳群の勢力が沿岸部地域の勢力と直接的な関係を結ばなければならなかった理由が、この段階にはなくなっていたことを示している。既述したように、瀬戸内海沿岸地域に築造された有力古墳が、海上交通に深く関わっていた勢力の存在を示すとすれば、それらの勢力の存在なしに安定的な経営が保障される段階に入っていたことになる。百舌鳥・古市古墳群の勢力にとって、政治的交通が山口県域に関しては、それまでのような沿岸地域の勢力との直接的な関係を必要としなくなっていたことが考えられる。

5. 瀬戸内海交通の安定的経営

つぎに、瀬戸内海交通の古墳時代前期における大和盆地東南部地域の勢力のもとでの成立から、中期の百舌鳥・古市古墳群の勢力のもとでの安定的な経営への展開について検討する。ここでは既述したように、物流という経済的交通ではなく、政治的交通での安定的な経営という視点で考える。

さて、瀬戸内海交通については、これまでに多くの研究があり、瀬戸内海沿岸地域における古墳やその出土品に視点をおいた研究から、最近では海上交通路自体に注目した研究も活発化している(間壁1970・松原2004・福永2005・柴田2007・近藤2008・谷若2012他)。

ここでは、これらの研究と視点を変え、輸送の対象となった物品のひとつである須恵器を手がかりにして考えてみたい。まず、須恵器を手がかりにするのは、つぎのよ

うな理由による。輸送される物品を対象とする場合、その物品は山口県域で生産されたものではなく、域外からもたらされたものであることが第一の条件になる。また、瀬戸内海交通を考えることから、域外とする地域は、畿内ないしは同地を経由して山口県域にもたらされたものであることが望ましい。このような条件を備えた物品としては、これまでに取り上げてきた古墳副葬品がもっともよく該当する。しかし、古墳の副葬品のように、小型で数量が限られた物品は、安定した経営とする恒常的な交通を考える場合には、必ずしも有効とはいえない。さらに、帯金式甲冑の出現をもって百舌鳥・古市古墳群の勢力との関係を考えることから、古墳時代中期前半ないしはそれに近い時期に新たに出現するものであるとともに、政治的交通として考えることから、その移動に政権中枢勢力である両古墳群の勢力の意図が強く反映されるものであるということが条件に加わる。とすると、検討の対象として取り上げる物品は、大型でかつ重量のあるものであって、その移動が継続性を持ち、数量的にも一定のまとまりをもつことが求められる。中期にあつて、このような条件をみたす物品は須恵器ということになる。

須恵器は、それまでの土師器に比べ、堅緻で耐水性に優れていることから、とくに液体の貯蔵に適している。このこともあつて、須恵器の生産開始当初から大甕の生産が盛んに行われ、また供膳具や古墳副葬品となるさまざまな小型器種の需要が拡大していく。

須恵器の生産は、図4に示したように、当初北部九州、瀬戸内、大阪南部などで開始される。しかし、そのほとんどは単発的な生産に終わり、継続性がみられない。初期の生産で福岡県朝倉地域（小隈窯・山隈窯・八並窯）があるが例外的で、百舌鳥・古市古墳群の勢力のもとで管理、運営されていく大阪府陶邑古窯跡群がほぼ独占的な生産を担っている（菱田1992・植野1993）。

さて、山口県域における古墳時代中期の須恵器については、小林善也氏の総合的な研究がある（小林善也2004・2008）。その研究によると、現在山口県域で確認できるもっとも古い須恵器は、山口盆地の南東部、樫野川左岸に所在する山口市西遺跡や下松市常森1号墳から出土したものである。小林氏は、とくに西遺跡第26号土壙出土の甕について、TG232型式や池の上I式との類似を指摘されている



図3 西遺跡出土須恵器（小林2004より）

る。また本資料については、胎土分析から陶邑古窯跡群産という結果が報告されている。本稿では、本資料を陶邑古窯跡群で生産された須恵器であると考え⁽¹¹⁾。

まず、山口県域で出土しているもっとも古い須恵器が小型器種だけではなく、甕という大型器種が含まれていたことに注目したい。流通が、生産地と消費地の分離によって成立とする考えにもとづけば（宮下2004）、既述したように、大型器種である甕の移動は、一定規模の流通の存在を示すきわめて象徴的な現象であるといえるからである。

さらに小林氏は、山口県域では中期に須恵器の継続的な流入があり、かつ山口盆地においてもっとも多く出土していることを指摘されている。一方、須恵器の分布が山口県域の前方後円墳の分布とよく似た傾向をもつことを示し、当該地域で5世紀以降前方後円墳が増加する傾向があることに注目され、このような現象が、大和政権による4世紀の海上交通の要衝としての瀬戸内海支配の完結にともない、内陸支配へと方向転換が図られた結果とも理解できるとする。

古墳時代中期以降、集落遺跡での須恵器の出土は、その生産を傘下におく百舌鳥・古市古墳群の勢力の影響が深く浸透していったことを示している。両古墳群のもとではじまった、大規模な専門化した生産によって生み出された須恵器が、継続的に山口県域にもたらされていることは、前期とは異なり、恒常的な交通が確実に機能していたことを強く裏付けている。

古墳時代中期半ば以降、製品としての須恵器の流入が山口県域でみられるようになるが、日本列島規模でその後の須恵器の動向をみていくと、中期後半には、須恵器の製品としての移動以外に、須恵器生産自体の拡散がおこる。生産の拡散は、産業構造、さらには地域連関構造にかかわるきわめて重要な現象でもある（小野五1992・田中2007）。

ここで須恵器生産の地域拡散を取り上げるのは、現在確認されている生産地がきわめて特異な分布状況のみせるからである。須恵器生産の拡散は、宮城県大蓮寺窯のようにON46型式段階にはじまる事例もあるが、多くがTK23型式からMT15型式の段階に生産が開始されることが指摘されている（菱田1992・植野1993・1998）。ところが、図5に示したように、生産の拡散が日本列島全域で一様におこるのではなく、とくに現在のところ瀬戸内海沿岸地域への拡散が明確でないことが注目される。瀬戸内海沿岸地域では、山口県域でみられるように、須恵器の需要がないわけではなく、その出土量からすると逆に需要が大きく高まった地域のひとつである。この現象は、瀬戸内海沿岸地域が須恵器の大規模な生産が継続する陶邑古窯跡群から製品として供給されていたことを示している。須恵器の出現以降、各地域での需要の高まりが、中期後半

勢力によって主導された鉄器生産をはじめ、大規模な専門化された各種生産によって生み出されたさまざまな製品は当然のこととして、人も、さらには馬といったものまでがその対象になったことであろう⁽¹²⁾。

6. 山口県域に投影された政権中枢勢力の動静

大和盆地東南部地域の勢力は、畿内政権の主導権を掌握した初期の段階から、山口県域に強い影響を与えていたことが竹島御家老屋敷古墳の存在から知ることができる。ところが、三角縁神獸鏡の推移を手がかりにすると、特定の有力勢力との関係が継続することなく、時期によってその供与の対象となった勢力が異なっていたことがわかる。このことは、山口県域に所在する諸勢力と直接的な関係を結ぶ上で、三角縁神獸鏡の供与主体者である大和盆地東南部地域の勢力側により強い選択権があったことを示している。

このような状況は、古墳時代前期後半になっても継続する。長光寺山古墳では、前方後円墳・竪穴式石室・三角縁神獸鏡・筒形銅器・鋳形石、さらに重厚な武器の副葬などがみられ、その出現は畿内政権の中枢勢力との直接的な関係を背景にしたものであったと考えられる。しかし、その後継の妙徳寺古墳では、前方後円墳という要素は継続するものの、埋葬施設は小規模な石棺系竪穴式石室にかわり、長光寺山古墳でみられたような葺石や埴輪を含め、政権中枢勢力との直接的な結びつきを示す「モノ」がみられなくなる。一方、熊毛（玖珂）地域では、前期末の柳井茶白山古墳の段階では大和盆地東南部地域の勢力との関係が、中期前半の白鳥古墳の段階では佐紀・馬見古墳群の勢力との関係がみられるが、白鳥古墳の後継古墳である阿多田古墳では、畿内政権の中枢勢力と直接的な関係を示す「モノ」がみられなくなる。前方後円墳を築造していても、埋葬施設や埴輪などの外部施設、副葬品の構成、またその質や量に大きな格差生まれる要因は、畿内政権との関係、さらにいえばそれぞれの段階の中枢勢力との関係の深浅の度合いにあったと考えられる。

さらに、現行の古墳編年からすると、前期後半に大和盆地東南部地域の勢力とも、佐紀・馬見古墳群の勢力とも直接的な関係をもっていた厚狭地域（長光寺山古墳）と、前期末に大和盆地東南部地域の勢力との関係をもっていた熊毛（玖珂）地域（柳井茶白山古墳）との力関係は、中期前半に新たに佐紀・馬見古墳群の勢力と関係をもつ白鳥古墳が全長120mという県下最大規模をもつ前方後円墳として出現するという差として顕在化する。このことは、前期後半における畿内政権内の主導権の交替とともに、瀬戸内海沿岸地域がもつ政治的交通の重要性とその掌握をめぐる地域勢力間の確執が、山口県域での主導勢力の交替という不安定要素を生み出したと考える。

一方、白鳥古墳と赤妻古墳で巴形銅器の出土がみられ、百舌鳥・古市古墳群の勢力が台頭する中期以降にも、佐紀・馬見古墳群の勢力が山口県域で大きな影響力を維持していたと考えられる。ところが、天神山第1号墳の後継古墳である赤妻古墳では埋葬施設が舟形石棺と箱式石棺であったこと、さらに赤妻古墳の後継古墳である新宮山1号墳では、墳丘の形態は前方後円墳であるが葺石や埴輪といった外部施設を欠き、さらに副葬品に甲冑がみられなかったことから、天神山第1号墳からはじまる百舌鳥・古市古墳群の勢力との直接的な関係は、中期でもその前半段階で途絶えることになる。つまり、山口県域における諸勢力は、政権中枢勢力との直接的な結びつきをもつことが勢力の台頭に、逆にその関係を失うことが急激な衰退、断絶につながるというきわめて脆弱なものであったといえる。

さらに、このような古墳時代前期から中期前半の山口県域でみられる諸勢力の動静は、前期の大和盆地東南部地域の勢力と佐紀・馬見古墳群の勢力が求めたものが瀬戸内海沿岸地域の勢力との関係であったのに対し、中期に百舌鳥・古市古墳群の勢力が求めたものが山口盆地という内陸部の新興中小勢力との関係であったという違いを示している。

また、畿内政権の中核勢力との直接的な関係を示す「モノ」が、前期では三角縁神獣鏡や筒形銅器などといった象徴的な器物であったことに対し、古墳時代中期前半には軍事的関係の成立をあわせ示す甲冑であったことは、この間にそれまでにないきわめて大きな変化が生まれていたことをうかがわせる。つまり、中期前半に百舌鳥・古市古墳群の勢力と内陸の山口盆地の新興中小勢力との間に成立した関係が軍事的関係を含むものであったことは、山口県域にあたる瀬戸内海沿岸地域での政治的・交通の安定的な経営を前提として成立したことを示すものであり、百舌鳥・古市古墳群の勢力が主導する畿内政権と山口県域の諸勢力との関係が新たな段階に入ったことを示している。

むろん、このような現象は山口県域だけでみられるものではなく、西日本を中心に広範な地域で顕在化する現象でもある（田中2001）。とくに、三角縁神獣鏡と帯金式甲冑の分布を対比させると、古墳時代前期前半から大和盆地東南部地域の勢力の強い影響のもとにあった地域を意図的に避けるように、百舌鳥・古市古墳群の勢力の影響力が拡大していく様子がうかがえる。その原動力のひとつになったのが、瀬戸内海交通の安定した経営の確立にあったと考える。

一方、山口県域でみられる主導勢力の交替は、たとえば都出比呂志氏が桂川右岸地域をケーススタディとして導き出された、政権中枢で生じた政治的変動と連動する地域内での盟主的首長の移動とは必ずしも一致しないことは注意を要する（都出1988・

1999)。山口県域における諸勢力の動静は、畿内政権の中枢勢力との直接的な結びつきの有無によって台頭と衰退を繰り返しているのものであって、畿内とその周辺地域で見られる動静と、その要因が本質的に異なっている。今後、山口県域の古墳の編年に変更が生じた場合に修正が必要となる可能性があるが、現時点では、畿内政権の中枢勢力側の意図による地域勢力の選択が大きな変動をもたらす要因になっていたと考える。いずれにせよ諸勢力の台頭と衰退は、首長個人と政権中枢勢力との直接的な関係、またその深浅の度合いによっていた可能性が高い。政権中枢勢力に近接して所在する畿内とその周辺地域の諸勢力と、山口県域に所在する諸勢力との空間的距離および政治的、社会的距離の違いがこのような違いとなって顕在化した要因のひとつであったと考える。

山口県域に投影された畿内政権の中枢勢力の動静は、周縁地域の諸勢力との関係を示すものであって、その検討は今後の古代国家形成にかかわる重要な位置を占めるものとする。

本稿の作成にあたり、市来真澄・唐沢陽司・木下恒・小林善也・佐藤力・藤田和尊・増野晋次・松永博明・村田裕一氏・山口市教育委員会からご教示、援助を受けました。ご芳名を記し、感謝いたします。

【註】

- (1) 今回は、畿内政権における主導権の交替に主眼をおいているため、国森古墳については言及を控える。
- (2) 宮ノ洲古墳の所在地については、「下松市笠戸島に続く砂嘴上」、また、「笠戸島に向かって南に短く延びた砂州の先端に位置する桂木山の東の山裾付近にあったと伝えられる」とされるが(中村2008)、ここでは、現標高4.1mをひとつの目安にして汀線を復元したことにより(村田裕一氏のご教示による)、桂木山が古墳時代には島嶼であったと推定する。
- (3) 当該時期の山口県域における古墳の編年については、すでに多くの研究が示されている。今回は、中村徹也氏が『山口県史 通史編 原始・古代』(中村2008)に提示された編年に従って考えるが、文中に示した編年図については、竹島御家老屋敷古墳・宮ノ洲古墳の時期、また、松崎古墳を前期末に遡上させるなど若干の改変を加えた。
- (4) 筆者は、三角縁神獣鏡の受容者側での伝世に否定的な立場を採っている(田中2008)。
- (5) 赤妻古墳から出土した巴形銅器は、形状が大型の部類に入り、古墳時代前期後半から出現するものと形状が異なるが、同様の性格を有するものとして考える。

- (6) 天神山第1号墳では、馬具の出土が伝えられているが、かりに馬具存在したとすれば、長方板革綴短甲や鉄鍔の形状からみる限り、日本列島では最古の馬具になる可能性が高い。この点については慎重な対応が必要であると考え。
- (7) 『山口県史 資料編 考古1』では、長方板革綴短甲との見解をとっているが、東京国立博物館に残されている資料が裾板だけとの教示を受けた（藤田和尊氏のご教示による）。ここでは長方板革綴短甲とすることは保留しておきたい。また、赤妻古墳出土の短甲については、共伴した頸甲の型式からすると三角板革綴短甲である可能性が指摘されている（藤田2006）。
- (8) 吉敷郡秋穂村大字大海所在古墳（現山口市秋穂東）に関しては、下記のような記録が『防長風土注進案』「小郡宰判大海村」にみられる。
- 「尉か墓
 郡廳評、墓とおほしきものハ見へされとも古濱の東面草生茂れる丘をすへて尉か墓とそいふ、山姫の穴といふに對へて呼へる名なるへし、ことし天保十三年より五十年許りまへに此丘より箭鏃鎧の草摺やうのもの、また陶器などのわれたるを穿出せし事ありといへり」
- (9) 宇部市西区宇部新川駅前所在古墳に関しては、山田亀之介『宇部郷土史話』では、「大正13年5月、西新川港町（現上町、筆者注）もと国吉信義邸前街路の中央あたりから、地表下、3尺くらいのところより長さ6尺、幅2尺5寸、高さ1尺5寸くらい、底もあり滑石の石棺らしきもの3個。3尺くらいの素焼の瓢形のもの、松の根にからまれ毀る。（土工の談）」との記載が、また山口高等学校歴史教室編1928『周防長門遺跡遺物発見地名表』では、三宅宗悦氏の報告として「円、石槨、鏡、玉、直刀、甲」との記載がある。宇部市教育委員会1968『宇部の遺跡』「第2章既知の知見 第2節古墳時代の遺跡」では、上記2報告を受けて両者は同一の古墳と判断し、「-略-、地理的条件から考えれば、この地域は砂丘地であり、円墳ではなく、箱式石棺群のように見受けられる。」との判断を下している。一方、同書「後篇考察」の「宇部の古墳文化」では、藤田等氏は、宇部新川駅国吉信義邸前の円墳について「横穴石室中から鏡・玉・直刀・甲が出土したと記載されているが、-略-。また（12）の同氏邸前で出土した石棺3基と3尺位の素焼瓢形土器との関係である。もちろん前者と同一とは考えられず、-略-。」として、両者が異なる遺跡であり、前者の石槨を横穴石室とする判断を下している。
- (10) 山口市藤尾山古墳、同猫山古墳は、前者が径30[㍎]、後者が24[㍎]の円墳で、両墳とも調査が実施されたが、埋葬施設が検出されていない。ここでは判断を保留する。
- (11) 図3に示した「西遺跡出土須恵器」については、小林氏の指摘（小林2008）より少し時期を下げて考えている。
- (12) 鉄器生産、馬匹生産等の生産拡散についても、ほぼ同時期にはじまっている（村上2004・桃崎2009他）。一方で、北部九州地域や吉備地域などの勢力が独自に朝鮮半島との交渉によって生産の移植を図っていることも考えられる（菱田2007）。

【引用文献】

- 植野浩三1993「日本における初期須恵器生産の開始と展開」『奈良大学紀要』21号
- 植野浩三1998「五世紀後半代から六世紀前半代における須恵器生産の拡大」『文化財学報』第16集
- 石母田正1971『日本の古代国家』岩波書店
- 小野五郎1996『産業構造入門』日本経済新聞社
- 小野忠熙1985『山口県の考古学』吉川弘文館
- 北野耕平1969「五世紀における甲冑出土古墳の諸問題」『考古学雑誌』第54巻第4号
- 小林善也2004「山口県の古式須恵器について－その編年と地域相－」『古文化談叢』第51集
- 小林善也2008「須恵器出現期以降の古墳時代集落出土の土器編年試論－周防西部地域－」『古墳時代集落出土の須恵器・土師器－5世紀から7世紀にかけての山口県の土器様相－』山口考古学フォーラム
- 近藤喬一2008「第5編大王陵の造営 第1章墳丘墓から高塚墳へ（前期古墳） 第3節謎の三角縁神獣鏡」『山口県史 通史編 原始・古代』山口県
- 柴田昌児2007「西部瀬戸内と芸予諸島周辺域における海人集団の動態」『古墳時代の海人集団を再検討する－「海の生産用具」から20年－』第56回埋蔵文化財研究集会発表要旨集 埋蔵文化財研究会
- 白石太一郎1969「畿内における大型古墳群の消長」『考古学研究』第16巻第1号
- 谷若倫郎2012「瀬戸内臨海遺跡の成立事情－芸予海域における古墳時代のようす－」『海の古墳を考えるⅡ－西部瀬戸内、灘と瀬戸から見た古墳とその景観－』予稿集 海の古墳を考える会
- 田中晋作2001『百舌鳥・古市古墳群の研究』学生社
- 田中晋作2007「王権による生産体制の変革と統制」『古墳時代の海人集団を再検討する－「海の生産用具」から20年－』第56回埋蔵文化財研究集会発表要旨集 埋蔵文化財研究会
- 田中晋作2008「三角縁神獣鏡の伝世についてⅠ－畿内およびその周辺地域における有力古墳の動態－」『古代学研究』第180号
- 田中晋作2009『筒形銅器と政権交替』学生社
- 田中晋作2012「猪名川流域に投影された政権中枢勢力の動静」『菟原Ⅱ－森岡秀人さん還暦記念論集』菟原刊行会
- 田中晋作2012「山口県域における諸勢力の動静とヤマト政権」『平成24年度企画展ヤマト王権と地方豪族－古代国家成立序章－』下関市立考古博物館
- 都出比呂志1988「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』22号
- 都出比呂志1999「首長系譜変動パターン論序説」『古墳時代首長系譜パターンの比較研究』大阪大学文学部

- 中村徹也1991「周防」『前方後円墳集成 中国・四国編』山川出版社
- 中村徹也2008「第5編大王陵の造営 第1章墳丘墓から高塚墳へ（前期古墳） 第1節古墳が造られた時代」『山口県史 通史編 原始・古代』山口県
- 菱田哲郎1992「須恵器生産の拡散と工人の動向」『考古学研究』第39巻3号
- 菱田哲郎2007『古代日本国家形成の考古学』京都大学出版会
- 福永伸哉2005『三角縁神獣鏡の研究』大阪大学出版会
- 福永伸哉2012「古墳時代政権交替と畿内の地域関係」『古墳時代政権交替論の考古学的再検討』大阪大学大学院文学研究科
- 藤田和尊2006『古墳時代の王権と軍事』学生社
- 富士埜勇1980「山口県の古墳」『古文化談叢』第7集
- 間壁忠彦1970「沿岸古墳と海上の道」『古代の日本第4巻 中国・四国』角川書店
- 増野晋次2010「前期古墳・埴輪集成編：山口県」『円筒埴輪の導入とその画期』第13回研究会 中国四国前方後円墳研究会
- 増野晋次2011「中国四国地方 中期古墳出土埴輪集成：山口」『埴輪から見た中期古墳の展開』第14回研究会 中国四国前方後円墳研究会
- 増野晋次2012「山口県域における瀬戸内の前期古墳について－中期前半までを対象に－」『海の古墳を考えるⅡ－西部瀬戸内、灘と瀬戸から見た古墳とその景観－』海の古墳を考える会
- 松原弘宣2004『古代国家と瀬戸内海交通』吉川弘文館
- 宮下正房2004『物流の知識』日本経済新聞出版社
- 村上恭通2004「古墳時代の鉄器生産と社会構造」『文化の多様性と比較考古学』考古学研究会
- 桃崎祐輔2009「牧の考古学－古墳時代牧と牛馬飼育集団の集落・墓－」『韓日集落研究の新たな視角を求めて』韓日聚落研究会
- 森田孝一1995『防長主要古墳編年概要』
- 森田孝一2008「第5編大王陵の造営 第2章巨大前方後円墳の時代（中期古墳） 第1節在地首長の台頭」『山口県史 通史編 原始・古代』山口県
- 山口高等学校歴史教室編1928『周防長門遺跡遺物発見地名表』

【関係報告書】

- 赤妻古墳 和田千吉1909「周防国吉敷郡赤妻の古墳」『考古界』第8篇第5号・古賀真木子1997『赤妻古墳』山口市教育委員会
- 阿多田古墳 潮見浩・木村豪章1978「平生地方の原始・古代」『平生町史』平生町役場
- 大塚古墳 岩崎仁志他1984『大塚古墳』山口県教育委員会
- 浄福寺古墳 久保幸子2006「浄福寺古墳測量調査」『山口市埋蔵文化財年報5－平成16（2004）年度』

山口市教育委員会

白鳥古墳 山口県教育委員会編1980『白鳥古墳』（平生町教育委員会）

竹島御家老屋敷古墳 島田貞彦1926「周防国富田町竹島御家老屋敷古墳発見遺物」『考古学雑誌』第16巻第1号・藤田等1963「山口県都濃郡竹島古墳」『日本考古学年報10（昭和32年度）』・山口県2000『山口県史 資料編 考古1』

長光寺山古墳 小野忠熙他1977『長光寺山古墳』山陽町教育委員会

常森1号墳 古庄浩明編2000『常森古墳群』下松市土地開発公社 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

天神山第1号墳 山口市教育委員会1979『天神山古墳』

西遺跡 石川克彦他1986『西遺跡』山口市教育委員会

松崎古墳 小野忠熙編1981『松崎古墳』宇部市教育委員会

宮ノ洲古墳 梅原末治1922「周防国都濃郡下松町宮ノ洲発見の古鏡」『歴史地理』第40巻第3号・山口県2000『山口県史 資料編 考古1』

妙徳寺山古墳 石井龍彦1991「妙徳寺山古墳」『妙徳寺山古墳・妙徳寺山経塚・栗遺跡』建設省山口市工事事務所・山口県教育委員会

柳井茶白山古墳 梅原末治1921「周防国玖珂郡柳井町水口茶白山古墳調査報告」（上）・（下）『考古学雑誌』第11巻第8・9号・柳井市教育委員会編1999『柳井茶白山古墳－保存整備事業発掘調査報告書－』

【挿図表】

図1 関連古墳分布図（田中晋作2012より）遺跡分布図は、国土地理院刊行の数値地図（国土地理院2000『数値地図50mメッシュ（標高）日本-III』）を使用し、片柳由明氏開発のシェアウェア『数値地図ビューア 5.10.4』によって作製した地図画像をベースとしている（地図画像村田裕一氏提供）。

図2 山口県域の主要前期・中期古墳（中村2008を改変）

図3 西遺跡出土須恵器（小林2004より）

図4 初期須恵器の生産地分布（菱田2007より）

図5 古墳時代中期後半の須恵器生産の拡散（菱田2007より）

表1 山口県域出土三角縁神獣鏡と段階（福永2006により作成）

表2 畿内政権中枢勢力と関係をもった古墳と関係が途絶えた古墳の内容比較（増野2012を改変）